

主 文

本件抗告を棄却する

理 由

本件抗告理由は「裁判所ハ黑白ヲ裁ク処ナレト民法八百七十四条離縁禁止デアルノニ相手方ハ詐欺ニヨリ除籍ヲナシ同法七百六十一条ガ有ルカ故脅迫ニヨリ検事和解ノ覚書ヲ作製シ津地方民事部ニ土地売買無効確認並ニ入夫婚姻無効確認ノ訴ヲ提起ノ彼等ノ偽証ト検事ガ訴訟手続ヲ無視シ判決ヲナサシメ父ガ控訴ノ手続ニヨリ永井検事ハ控訴ヲ取り下ゲヨ取り下ゲナカツタ為メ検事ハ公訴ヲ提起シ判事ハ公訴ヲ受理シ刑事訴訟法三百四十二条ヲ無視シ父ガ依頼シタル弁護士（Ｂ）モ職務ヲ忠実に行ハザリシ為（弁護士法二〇条）父ハ有罰ノ判決ヲ受ケ私等迄没収刑ノ罪ヲ被セ刑事ニ於テ没収物ヲ処分セス（刑事訴訟法五百五十七条）世間ノ人ノ笑レ者トナリ脅迫ニ依ル検事和解ノ覚書ト刑事判決書ヲ民事裁判ニ提起シ理由ヲ主張スレ共敗訴トナリ民事訴訟法四百二十条ノ六号七号ノ場合故刑事訴訟法ヲ開始シ永井検事外六名ヲ告訴ヲ為シタレ共原判決ガアルガ故当裁判所窪谷検事ガ公訴ヲ提起セズ再審ノ請求ヲ為シタノデアル左ノ事実ニヨリ推察スル事ガ出来ル事実昭和十五年八月頃ＤＥノ兩名ガ私方ニ来リ私ノ長男Ｆ及私等家族ノ者ニ向ツテオ前ノ父ＧハＨ家ノ印鑑ヲ偽造シＨ家ノ財産ヲ横領シテ居ルガ横領物件ヲ返還スレバ告訴ヲセヌ又既ニ私方ハ親類合議ノ上入籍シテアルＩノ籍ヲ抜ケバ罪ニスルヤウナ事ハセヌ又己達ノ要求ヲ聞キ入レ履行セスバ少ク共懲役九年位ニ処分スルトカ誠ニ聞クニ堪エザル言葉ニテ私等初メ家族ノ者ヲ非常ニ恐レサシマシタ其ノ時Ｉノ籍ヲ抜ケバ同時ニ二筆ノ畑ヲ私方ヘ返シテ呉レル下話ガアリマシタ同年九月頃Ｊノ証人ニヨリＨ家ヨリＩノ籍ヲ抜ケ告訴ハセンデ其レニ就イテ二筆ノ畑ハＫノ方ヘ返ストノ申込ニヨリ双方妥協ガ付イタノデアリマス其レ故同年九月十二日ニＩノ除籍ト同時ニ二筆ノ畑ノ名義変更登記ヲ終ヘタノデアリマス前述ノ如ク相手方ノ要求ニ随ヒ当方履行セシニカカワ

ラス相手方ハ約束ヲ守ラス直チニ告訴ニ及ンダノハ甚ダ迷惑ニ堪ヘマセ又昭和十五年十月三日安濃津区裁判所検事局ヨリ私ニ出頭通知ガアリマシタノデ同日出頭シマシタ時検事調室デ相手方ノ居ル処デ永井検事殿ガ申サルニハ才前ハ悪イコトヲシテ居ル本事件ニ対シ少ク共ニケ年ノ懲役ノ罪ガアルガ相手方ノ登記費用並ニ組内費用各百円其他ヲ出シ相手方依頼ノ弁護士M方ニ行キ先方ノ要求ニ服セバ罪ヲ免シテヤルトノ御言葉デシタノデ早速当日M弁護士方ヲ訪問シマシタ所相手方ノMNEOLノ五名ハ私ノ行クノヲ待テ居マシタ其ノ席上予メ作テ有ツタ書類ヲ差出シM弁護士ヨリ本書類ニ記名捺印ノ上色々ノ費用トシテ金四百六十円出金セヨトノ事デシタ然ラバ才前ヲ罪ニスル様ナ事ハセヌト云ハレマシタガ其ノ書類文面委細ノ説明ヲ乞フタ所同弁護士ハ読メバ判ルトテ一回ノ説明モナク且又才前ガ此ノ書類ノ記名捺印セネバ改メテ告訴シ同日迄ノ告訴モ取り下ゲズ罪ニスルトノ事ヲ云ヒ居合セル前記五名モ口ヲ揃ヘ捺印セネハ改メ告訴スルトカ色々恐カラシヲ云ツテ強要シマスノデ私も恐シクナリ強迫ノ余リト一切罪ニセヌトノ事ヲ信シ書類面ヲ吟味スル余裕モナク強要セラレルマ、心許ナク記名捺印シマシタ検事調室ニ於テ相手方ノ居合ス所デ永井検事殿ノ申サレタ金額ハ貳百円余リノ事デシタガM弁護士ノ要求ハ四百六十円デアリマスノデ其ノ間多額ノ相違ガアリマス其ノ差ノ点ヲ聞ク事スラ恐ロシク請求ノ金額ハ後日持参スルト云ツテ帰宅シマシタ其ノ帰りM弁護士ハ四百六十円納ムレバ親戚間双方円満ヲ計ヒ罪ニスル様ナ事ハ絶対セスト申サレマシタ然シ帰宅シテカラ良ク考ヘテ見マシタガ同日M弁護士方テ捺印シタ書類ニハドンナ事ガ書テアツタカ不安ニ堪ヘス又四百六十円ハ何金カ分ラズ為ニ翌日永井検事殿ニ面会シテ書類ノ内容ヤ四百六十円ノ使途ヲ尋ネタ所説明トコロカ返ツテシカラレマシタ最早ヤ私カ致シ方ナク強迫捺印サセラレタ書類ノ内容ヤ四百六十円ノ事情等一切不明乍ラ只ニ恐シサノ余リM弁護士ヨリ要求セラレタ通り昭和十五年十月七日現金ニテ四百六十円ヲ持参シM弁護士ニ手渡シマシタ其ノ時モ前述ノ書類ノ内容ヲ尋ネタ処説明ナリ且

又該書類ノ写ヲ呉レト懇願シタル所写モ呉レマセヌデシタ前述ノ如クニテ私方ハ先
方ノ要求通り履行シタルコトニ付之ニテ總テガ落着シタ事ト思ヒ居タル所先方（相
手方）ハ既ニ土地売買無効確認ノ訴訟ヲ提起シ安濃津地方裁判所ニ於テ一回ノ（相
手方ノM弁護士ガ弁論ノ当日出頭セズ共良イト云ワレマシタノデ）弁論モナク確認
決定シマシタノデ誠ニ私方トシテ驚キ本人I不在（出征中）ニ拘ラス確認ハ不当ニ
思ヒ名古屋ニ控訴シマシタ所永井検事ハ右訴訟ヲ取下ゲレバオ前ヲ起訴セズト申サ
レマシタガ私トシテ息I本人ガ国家ノ干城トシテ出征不在中ニ拘ラス前記判決ハ誠
ニ残念ニ思ヒ取下ゲシナカツタ為力止ムヲ得ス拘置セラレマシタ拘置中B弁護士ガ
控訴ヲ取り下ゲヨト云マシタ）其ノ後予審進行ニ伴ヒ相手方ノ予定行為ガ判明シマ
シタ不動産ノ所有権移転登記ニ使用セシ印鑑偽造云々ノ点ハ相手方（P）既ニ承諾
シ居タルコトトテ其レニ必要ノタメ印鑑証明ヲ本人（P）ガ役場ヨリ受領スル様申
シタ所P自ラ役場ニ出頭シテ印鑑証明請求受領シ来リ私ニ渡シマシタ只其ノ際ニ実
印ハ途中ニテ遺失シタト云ツテ私ニ渡シマセンデシタ然シ後日ニ至リPガ申スニハ
役場ノ帰途Eニ教ヘラレテ印鑑遺失ノ様ニ云ツタガ事実デナク私ガ持ツテ居ルトテ
自分ノ浅慮ヲ詫ビ改メテ実印ヲ私ニ渡シ呉レマシタPガ印鑑遺失シタト申シタノデ
既ニ本人（P）モ承知シテ居ル事ニ付改メテ（H）ノ印章ヲ注文製作セシメタル
ガ其ノ後ニ至リ前述ノ通り（P）ヨリ実印ヲ私ニ渡シマシタノデ不要トナツタ印ヲ
削ツテ捨テマシタ其ノ事実ト予審ノ調ニヨリ本人（P）ヨリ申立テテ居リマス尚覺
書記載ノ第七項ニアル損害並ニ其ノ他費用トシテ金四百六十円出金スル様記シテア
リマスカ何等私方トシテ損害金ヲ支払フ可キ理由モナク其当時M弁護士及相手方一
同ニ強要セラレ余儀ナク且又検事殿ノ御言葉モアリ只々不要領乍ラ強迫セラレ恐口
シサノ余リ出金シマシタ本事件ノ事実ハ前述ノ如クニテ覺書ハ前記ノ如ク私ノ真意
ヲ製作シタノデナク相手方ガ勝手ニ製作シ私ヲ強迫シテ記名捺印サセタモノデ其ノ
様ナ覺書ヲ持ち出シ証拠トシテ事毎ニ抗争セラル、ハ甚タ残念ニテ此ノ様ナ事ニテ

ハ何時迄モ親戚和解ノ時期ハ到底来ラヌト思ヒマス私ノ真意トシテ今日迄ハ家ノタメ後見シ且又事実同家ニ尽シ親戚ノ申出テモアリエヲ同家ノ養子相続トシテ同家ノ負債ノ一切ヲ引受ケ生来双方ノ繁栄ヲ目的トシテ事毎ニ善処シ尽シタル行為ニ叛キ養子トナルエ出征スルヤ其ノ戦死ヲ恐れ変心シテ他人ヤ親戚ノ使噓ニアリ私ノ尽シタ行為ヲ無視シ後見人タル親子関係ニアル私ヲ無実ナル印鑑偽造等デ告訴スルトハ実ニ以テ非人道ニテ私ノ今ノ意トシテハ万止ム得ズ後見以来種々ノ物件ヲ後見就職前ニ復シ貸借金及立替金等一切私ノ満足出来ル迄ニ返戻ヲ受ケ解決致シ度ク思ヒ居リマス右ノ次第ニテ本件ノ事情事実並ニ覚書製作当時ノ事情ニ対シ宜敷ク充分ナル御吟味下サラン事ヲ一重ニ懇願スル次第デアリマス証拠書類昭和十九年五月廿七日安濃津地方裁判所検事局ニ提出セシ書類一、戸籍謄本及刑事ノ判決書二、印鑑鑑定書三、覚書及領収書四、不動産無動確認ノ訴状五、民事口頭弁論調書六、刑事ノ証人訊問調書四通昭和二十二年一月十日安濃津地方裁判所刑事部ニ提出ノ書類一、原判決謄本二、除籍謄本三、覚書写シ口頭弁論調書並ニ印鑑簿四、印鑑々定書（告訴状ニ謄本提出）五、大審院検事局棄却ノ決定通知書（写シ）六、Q名義地租及日附加税ノ領収書。

請求書 除籍後永井検事ノ諒解トEノ証言（覚書ニヨリ津地方裁判所民事部ニ於テ入夫婚姻ヲ無効ニ為シ刑事ニ於テ其ノ事実ヲ知り乍ラ父ニ有罪ノ判決ヲ為シ私等迄罪ヲ被セ永井検事外六名ヲ告訴ヲナシタレド原判決ガアルガ故起訴サレズ再審ノ請求ヲ為シタノデアル津ヤ名古屋デ調ベル部門デナク当裁判所ニ於テ調ベル事法律及判例明記セラルル所ナリ共犯ニヨル犯罪ノ違法ナル点ヲ挙ゲテ見ヤウー、相手方ハ証拠ニ対シテ事実ノ事ヲ云ツテ居リマスガ刑法百六十九条百七十二条二、M弁護士ハ公務員トシテ職務上取り扱ヒタル事件ニ附告訴代理ガ出来マスカ（弁護士法二十四条第三項）三、永井検事ハ法律ヲ正当ニ裁判所ニ請求シテ居リマスカ（裁判構成法六条）四、判事ハ事実ヲ知り乍ラ取調ベル限度ヲ調べテ居リマスカ（刑訴三百

四十二条)五、B弁護士ハ誠実ト通告ヲ行ツテ居リマスカ(弁護士法二十条二十六条)尚刑事ニ於テ裁判執行出来ズ民事ニ於テ強制執行出来ズ監督権ノ懲戒追訴ヲ無視シ公判詐欺ヲナシ法律ヲ知ラナケレバ放置デアリシカ知ツテ居レバアク迄事件ヲ終結セネバナラナイ若シ人権及憲法ヲ無視シ延滞シタレバ過激ナ手段ヲ取ルヨリ外ニ道ナシ答弁書及決定ナキ時ハ二月中ニ上京致スベク筈ナリ」というのであるが。

最高裁判所が「上告」と「訴訟法において特に定める抗告」とについて裁判権を有することは裁判所法第七条の明定するところであつて右にいわゆる「訴訟法において特に定める抗告」というのは、刑事事件については日本国憲法の施行に伴う刑事訴訟法の応急的措置に関する法律第十八条に定める抗告のように、特に最高裁判所に申立てることを許された抗告をいいたとえ高等裁判所のした決定又は命令に対する抗告であつても、このような特別の定めのないものは含まないものと解すべきである(当裁判所昭和二十二年(つ)第七号同年十二月八日第一小法廷決定参照)。

従つて、本件抗告が最高裁判所に申立てることを許されるものであるためには、前記刑事訴訟法の応急的措置に関する法律第十八条の定める抗告に該当するものでなければならないのであるが、本件抗告が右法条にいう「原決定において法律、命令、規則又は処分が憲法に適合するかしないかについてした判断の不当であること」を理由とするものでないことは抗告状自体によつて明白であるから本件抗告は之を不適法として棄却すべきものとし、刑事訴訟法第四百六十六条第一項により主文の通りに決定する。

昭和二十三年二月十七日

最高裁判所第三小法廷

| | | | | | | |
|--------|---|---|---|---|---|---|
| 裁判長裁判官 | 長 | 谷 | 川 | 太 | 一 | 郎 |
| 裁判官 | 井 | | 上 | | | 登 |
| 裁判官 | 庄 | | 野 | 理 | | 一 |

裁判官

島

保